

『格闘去勢少女』



玉子王子 著

## 一章 爆乳美少女対強豪レイパーボクサー

薄暗い路地。

足早に歩く少女。ちらちらと携帯を見ている。

コンクリートブロックの壁に、「痴漢注意」と書かれたポスター。

ちらっと見て、うつむいて離れていく。

——気弱そうだな。

少し離れたところにいる男。フードにマスク。見るからに怪しい。

不審者と見られ、正義感が強いものに声をかけられることもしばしば。

が、彼は慌てない。ジャブの一発でノックアウトだ。かつてはプロボクサー、結局食えず、今大学に入りなおしている。官僚になり、できれば警察関係に、と考えていた。

大学では我が物顔だった。

見るからに狂暴そうな背の高い男で、元ボクサーとなると皆愛想笑いだ。

女に声をかけても、怖がってひどい振られ方などするわけがない。強引に押せば割と何とでもなる。

が、そんなものに興味はなかった。

——やっぱり、女は無理やりだ。レイプでないと立たねえよ。って、もちろん嘘だけどな。さすがに毎回レイプじゃパクられる、滑り止めの女はいる。

どうでもいい女を三人ほど確保していた。

強引に、恋人がいるものでも奪い取った。文句は言われなかった。

好き勝手生きてきた男。

前を歩く少女に狙いを定めていた。

——高校生ぐらいか？ ラッキーだぜ、この前のはOLのババアだったからな。まあ警察に行かなかった感じだから、そこはラッキーだったけど。どのみち、捕まらねーけどな。こんな俺が目指してるのが警察幹部だってんだから笑えるぜ。

小走りで近づく元ボクサー。

ボクサーだけに、ランニングには慣れている。前にすぐに回り込めた。

「え、なんですかあなた？」

ふわっとしたツインテール、普段は人当たりのいい笑みを浮かべているのではないかと思える垂れ目に小ぶりなで形のいい口。美少女とっていい容貌。

それが両手を胸の前に縮こませ、いかにも怯えた様子。

ボクサーの頬が緩む。

——へへ、やっぱり気の弱い奴だ。たっぷりかわいくなってやるぜ。これなら警察にも言わないだろうし反撃してくるとも思えねえ、やりたい放題だ。

「へへへ、ちょっとこっち来いよ。おとなしくしてたら、怪我はさせないからよ」

言われて、少女の表情が消える。

怯えたような表情が消え、むしろ芯が強そうな眼の光を見せる。

周りの連中が「あんなオタクやめとけよ」といっても、普通に好きになり、好きになったなら付き合う、そんな強い「自分」を持っていそうな鋭い目の光。

こいつは気弱だ、いける。そう思い込んでいなければ、ボクサーもその光に気づいたかもしれないが、もはや油断しきっていて表情の変化に気づかない。

それに向け、少女が話し出す。

「へえ、確かにあなたなら怪我はさせないでしょうね」

「ああ、そうだよ」

「ここで襲ったOLさん、覚えてますか？」

ビク、と体をこわばらせるボクサー。

「お前、あいつの知り合いか？」

——どうということだ？ あ、待ち伏せか？ いや、周りから誰か出てくる様子はない。じゃあこいつ、ナイフでも持ってんのか？ いや、銃タイプのスタンガンか？ テーザー銃とかいう……まずいぞ、こんなガキが俺に勝てると思ってるなら、何持ってるかわからねえ。スプレーの可能性もある。

こんなガキが俺に勝てるかよ！ と何も考えず対処する男なら、すでに捕まっている。官僚を目指して大学に行くような犯罪者だ、知能犯寄りだった。

ボクシングの構えをしつつ、慎重に距離をとる。しかしレーザー銃だと離れすぎもまずい。パーカーを脱ぎ、手に巻く。

——これで防げるか？

「あは、お兄さんビビりすぎ」

ニコ、と少女がほほ笑む。

「私、何も持ってないよ？」



確かに、少女はどう見ても何も持っていない。薄いシャツとミニスカート。シャツの中の胸は年齢を考えずとも巨大といい、スイカでも抱えているような爆乳。シャツの胸元は開いていてノーブラにさえ見えた。

ボクサーはそれにこの時気づく、先ほどは少女が胸の前に手をやっていたのでわからなかった。

目の前の美少女が爆乳と気づくと、男としてにやけざるを得ない。

「へへへ、今日は当たりだな。ケガさせないから、おとなしくしてろよ」

「お兄さんなら、確かに怪我させないね」

にやり、と歯を見せる少女。

ケガさせない、と何度も言うのは、自分を安心させるためではない。

相手を嘲るためだった。

「だって、聞いた話じゃ、お兄さんのおチンチ○このぐらいだし」

親指と人差し指でこれ見よがしに小さな隙間を作って見せる。

かっ、と真っ赤になるボクサー。

「こ、このガキ……」

「私処女だけど、こんな小さいのなら血も出ないかもねえ、確かにお兄さんの言う通り、怪我しないで済みそう。お兄さんのなら、誰も怪我しないねえ」

にやにや、とボクサーの股間を見る。

唇を噛むボクサー。

——こ、このガキ、このガキ……なんで俺のがその……平均よりちょっと小さめなのを知ってたよ？ いや、この前やった○Lの知り合いだからか？

「あ、その顔。なんで知ってるのかって顔だね？ もちろんあなたがひどい目に合わせた人から話を聞いたの。一人じゃないよ？ 何人無理やりやってんのって話。まあ普通じゃ相手集まらないか？ こんな貧根だもんねー」

「な、なんだヒンコンって……」

「あ、ごめんなさい。粗チンの事。粗チン粗チン、お兄さんのみたいな幼稚園クラスの小さいおチンチ○の事」

「粗チンじゃねえ！ わからせてやる！ ぶち込んでわからせてやる！」

ぶち込んだらむしろ「粗チンだとわからせてしまう」ことになりそうだが、とにかく激昂するボクサー。

踏み込む。道具がないなら女など楽勝。

——多少格闘技でもやってんだろうが、女だからって周りに加減されていい気になってんだろ。顔面ぶん殴って目を覚まさせてやる！

素早いジャブ。

「わっ」

下がる爆乳少女。空気が裂ける。

ジャブだけはチャンピオンクラスといわれた男である。

「オラオラ、顔面ボコボコにしてやるよ！」

右ジャブ、右ジャブ、左ジャブ、下がる少女。

当たらない。

というより、紙一重で見切っている。

が、そんなことをされたことがないボクサーは漠然と外れているだけだと思っていた。

——追いついてきたぜ！ プロのステップ相手じゃ、逃げ足だけじゃどうにもならねえんだよ！  
横に逃げられないようにフェイントで左右に動きつつ、着実に追い詰める。

ブンブンと、太い腕が少女の左右を通り過ぎる。

ほとんど密着状態。

しかし、拳は当たらない。

当たらない。

ギリギリで当たらない。

攻撃の半分どころか、五発に一発でも当たってれば少女など瀕死になりかねない強烈なパンチの連打。

しかし、一発すら当たらないので当然無傷だ。

よけながら、少女は先ほどと変わらず、息も上がらない。

普通に歩くように避け続けている。

——こ、このガキ……なんで。

チャンピオンを目指すレベルのボクサーだ、見切りなどやられたことがなくとも、徐々に気づいてくる。

疲れてはいない。だが不思議な汗が流れてくる。

飛んで離れる男。

肩をすくめ、ブルンと爆乳を揺らす少女。

「不思議そうね。……歩法って聞いたことない？」

「古武術とかにあるステップだな？ 古臭い……」

「古臭いのは認めるけど、効果があるから残ってきてるんだよ。特にうちのは特別」

「なんて流派なんだよ。桜津流か？」

古武術好きの狭い世界で語られる伝説的流派。

その存在は謎に包まれている。わかっていることは二つ。

古武術の中でも相当に古いものだということ。

そして、笑うしかないことに「最強」と呼ばれているということ。

いや、それは「わかっていること」といっていいのか。

—— ついでに、朝廷に裏で仕える一族の一子相伝で邪魔ものを暗殺してきたとかなんとか、漫画みたいな話もよく話題になってるな。最強の暗殺者一族なんて子供が考えた話かよ……

頬が引きつる。大人として、笑うしかない。

「おいおい、返事がねえな。まさか、桜津流かよ？」

ため息をつく少女。

「そう思う？」

「はっ、冗談だ。で、どこの流派だ？」

一様ボクサーであり、武術の知識がある。流派がわかればある程度つけこむ余地もあると思えた。

眉をしかめ、笑う少女。

「ま、どこでもいいよね」

「言えないような流派か？」

「まあ、そうなんだ。で、そろそろ反撃していいかな？」

「はん、やってみろよ。逃げ回るだけより……ほうっ」

す、と音もなく踏み込む少女。

ボクサーはもちろん警戒していた。

しかし動けなかった。

踏み込んできて、密着した少女に太ももを触られ、そのまま手を摺り上げられた。ぎゅむ、と鍛え上げられたボクサーの体の中で唯一鍛えようがない部分を掌に収められる。

「はおおお、ちょ」

「動かないでね。うふふ、金ちゃんは普通か。棒のほうは並みよりかなりささやかだけどね」

もみもみと揉み解す。手の中で肉塊を弄びつつ、華奢で柔らかい手がしっかりと男の形を認識する。

——ば、バカな……なんで近づかれた！？ なんだ今の溶けるような動きは……

全身から汗が噴き出す。

それは急所を握り締められた絶望的状况だからだけではない。

——漫画のコマみたいな「段階を踏んだ動き」じゃない、動画みたいにスムーズに流れる、動きと動きの間に区分けのようなものがない……わけのわからねえ感じだ……あんなじゃ反応できねえ。なんていうか「不自然さ」がなくて、頭に引っかからない……あ。

「ほおおお！」

ぎゅううううう、右手を突如握り締め始める少女。その中に男の最も虚弱な部分があることなど意に介さない。いや、すべてわかっていて握っている。

にやにやと、優越感に満ちた目で男の顔を見上げながら。

「やだ、爪先立ち！ 金の玉握られた男ってみんなこうだよ。っていうか「ほおおお！」って受けるんだけど」



「あぐううう」

——このガキやめろ！ どこ握って……そこは男の……最大の……おおっ！

「ほうううう」

「んー？ んー？ 何か言いたいのかな！？ あは、キャン玉タマタマ思いきり握られたら身動き取れず話もできないよねえ、男ってみんなそう。でっかいチ○ポブラブラさせた露出狂の変態おじさんもキュッとね、こうやってキンキン握ったら「はぐうう」で「気を付け」体勢でつま先立ちだったし。超うけるよねえ！ きゃはは！」

笑いつつ、左手を男の右手に伸ばして、引っ張る。スカートの股間に。

「ここは公平に行こう。同じように握り潰していいよ。どっちのタマタマが先に潰れるか競争」

「はひいい、はひいい」

「ほらほら、玉緩めてあげたんだから、そっちも同じように握る。で、競争よ」

「で、でも……お前玉……おぐううっ！」

「おっと、うっかりして居ったわ。私はこんな、クツソしょうもない急所ぶら下げてないんだった！ あは、だって女の子だもん★ ほらほら金握りー、ん、やだ、一様握りに来てるね。結構力強いじゃん、玉潰されかけてるのに。でも、ざんねーん、そこには握るものないでーす。男の股間は絶対急所、女の股間は絶対無敵」

「ほおおおおお」

「ほらほらー、女の股間握り潰しなさいよー、何を潰すのか今一つわからないけどねー。お、握ってる握ってる、じゃあ潰される前に潰してやんよ」

「おおおおおおおお！ やめええええええ！」

「大丈夫、大丈夫よ、安心して」

「ほおおおおお」

震え、嫌な汗を吹き出しながらなんとか目だけ少女を見る。

ニコニコと笑い、今から他人の臓器を破壊しようとしているようにはとても見えない。

——あ、そ、そうか。そうだよな。さすがに本当に玉握り潰すわけねえ。いくら玉の一つもない出来損ないでも、玉潰れたら人生終わりだってことぐらいわかってるはずだ。女も抱けねえ、子供も作れねえ……そんな、たかがレイプした位でそんな……やるわけねえ。

「大丈夫だよ、今はナノテクでタ○キンぐらい簡単に治るんだから」

コンビニで売っている薬で一〇秒で再生可能。ただ、痛みや衝撃は消えない。

「治るんだから、潰されても大丈夫という理屈」

「ちょ、ちょ……それ大丈夫って……おおおおお！」

「じゃけんレイプ魔のタマタマは二個ともしっかりと潰しましょうねー」

「ふんぎいいいいいい！」

「そらそらそらああ、玉の形変わってきたよ！ 手の中で、こう……ね？ 男ならわかるでしょ？ もう潰れそうなタマタマの形。おほ、潰れる、今潰れる、お、今かな？ 一瞬後？ 潰れちゃうよー、痛いぞー、男終了だぞー、てまあ実感ゼロなんですけどね？ だって女の子だもんー」

涎、鼻水、涙で顔面が解けていくボクサー。

——やめえええええ！ そこ、ダメえええええ！ 男の、男の……男のおおおおおお！ ちょ、ま、ごめん、レイプしてごめんんん！ 殺すううううう潰したら殺すうううううそこだけはマジでやめてえええええ！

頭の中でさえ絶叫するボクサー。膝を締め、爪先立ち。そんなものではもちろん何の防御にもならない。

唾を飛ばし、目を見開いて顔を真っ赤にする少女。

「やだ、粗チンぴくぴくしてる！ 子孫残せなくなる危機で、勃起したがつってる！ 割といるのよねえ、**去勢勃起**するタイプ！ デ○チンだとうざいけど、粗チンは関係ないね！ ありがとうお兄さん、チ○コ小さくてありがとう！ ご近所の皆さん、この人チンチ○小さいで一す！ おチンチ○小さいで一す！ でもそんなもの男性の魅力と何の関係もないので、この人のおチンチ○が超粗チンだってことは気にしないで上げてくださーい！ そして今、女の子の手で、なんとキャン玉！ 大事なキャン玉を潰されそうになってまーす！ でも治るので、温かく見守ってあげてくださいーい！」

「ひiiiiiiiiiiii！ 許して許して玉だけは許してっ！ 玉無しになる玉無しになる！ それだけはいやああああ！」

「ぎゃはははは！ ヤバすぎて声出てんじゃん！ こりゃタ○キン終了待ったなし、男終了待ったなし、ってところね」

周りをちらっと見る。

人通りがなく、周りに民家も何もない。寂れた工場などが壁の向こうにぼつりとあったりするだけの何もない路地だ。

ボクサーはその辺の空き地や廃工場に女を連れ込んでよくレイプしていた。

そんな場所だから、泣こうがわめこうが誰も来ない。

そういう場所なのを知っているのだから、あえて少女もいもしない「ご近所」に叫んでいた。

「あはは、潰れろ、潰れちまえ！ レイプかますようなクソオスは去勢だ去勢！ 女性の痛みを知りなよ！ 去勢十万回でレイプ十万分の一ぐらいの痛みにはなるよ！」

「ひiiiiiiiiiiii！ 重過ぎるうううう！」

「何が重すぎよ！ 粗チン磨り潰すよ！？ 治らないならまだしも、治るんだから何でもできるんだからねー」



「やめてえええええ！ んぐうううう！」

めり、と嫌な音が少女の手の中で鳴った気がした。

ベロリ、と舌なめずりする少女。

「ほーらほら、潰れろー、潰れちまえークソオスキんキン潰れちゃえーレイブ魔野郎は玉抜き手術がお似合いだよー」

「許して、ゆるぼぎゃあああああああああ！」

「ぎゃはははははははははは！ 手の中の丸っこい何かが、無くなっちゃった！ ブチュッと潰れちゃった！ クソオス終了！」

手を放し、パンパン叩く少女。

白目を剥いて、腰を引くボクサー。

ボクサーのマスクを取り、泡を吹く顔を同じく腰を引いて高さを合わせてみる爆乳少女。

「んふふふ、やっぱりいいわねえレイブ野郎がキンキン潰されて男じゃなくなるのを見るのは」

いいつつ、スマホを取り出す。

写真を見る。

「うん、やっぱりこいつだ。っていうか、別の奴だろうが私の事犯そうとしてたからレイパーだけど。うん、標的」

カシャ、と写真を一枚。

ボクサーが倒れると、ズボンとパンツを下げる。

プルン、と小ぶりの一物が揺れる。

丸出しにさせておきながら、少し恥ずかしげな顔で目をそらす、すぐに戻す。

しゃがみ、まじまじと、反り立つ小物を見つめる。

「おほ、ちいせー。なにこれ、立ってんの？ 太ももはがっちり鍛え上げられた細マッチョなのになえ」

スカートのポケットから瓶を取り出す。

金弛緩剤と呼ばれる薬。

本来男性器手術用のもので、そこが縮まないようにする。

しかしここ、うさぎ県では世界一ドSの女性の割合が多いといわれる関係上、SM用に金弛緩剤が出回っていた。

気絶したボクサーの口に押し込む。

すぐに効いて、ギョングョンに縮みあがった肉袋が緩む。

股間のほうに戻っていた少女がにんまりとほほ笑む。

「うふふ、これよこれ。こうでないとわかんないもんね」

無防備な丸出しの股間に手を伸ばし、端のほうを両手でつかんで、ぐにーと袋を引っ張る。

「おー、伸びる伸びる。いつ引っ張ってもキ○タマ袋は伸びるわねえ。でも、あれ？ おかしいぞ、おかしいぞ？ キ○タマ袋のはずなのに、肝心のものがないな？ 金のタマタマ、男のシンボルがないな？ これじゃただの袋だよーおかしいなあーぎゃははははは！」

一人で楽しそうな少女。陽気というかなんというか。

「まあ、崩れた肉の残骸はあるみたいだけだね。グリグリ、気絶してても痛いでしょ？」

「うぐうううっ！」

「ぎゃはは！ レイプの報いだから、このぐらい当然だってばよ。治ればすべてよし、ノーゲーム、じゃけんゴリゴリゴリゴリ」

「あがあああああああああ！」

白目を剥き、気絶したままで叫ぶボクサー。

いや、痛みのあまり目を覚ます。

「ふざいいいいっ！ な、なにがああああああ！ いでああああああああ！」

「ぎゃはははは！ 大丈夫、傷は浅いよ！ 両タマタマな完全に潰れて男じゃなくなっただけ！」

「あああああ、う、嘘だああああああ！」

「っていうか治るんだから平気平気。大丈夫。そら、残骸ぐりぐりー」

「あああああああああああ！」

実際のところ、潰れた時より今のほうが痛いのではないだろうか。全く強度がない、崩れて不定形になった睾丸を指で磨り潰されるのだから。

ガクリ、と再び気絶するボクサー。

「おや？ もう気絶？ ったく、男のくせに情けないな。あ、もう男じゃないんだっけ？ じゃあしょうがないね、玉無し君じゃ。ぎゃはははは！」

——ハジメの調査によると最低十人は犯してて、周りの奴にそれを自慢するような馬鹿だから、このぐらい当然の事よね。私へのレイプ未遂だけでこれはきついでね。それだけなら、去勢だけで十分だし。でもこいつの罪状なら、これは当然。

グリグリと、あくまでも残骸を指で磨り潰す少女。

片手で潰しつつ、もう片方の手で画像を撮る。依頼人に見せる制裁画像だ。

ビクン、と小指のような一物が痙攣する。

「お、出たわ。あは、タ○キンが普通の大きさだから、出るものはある程度出るのね」

——処女なのに射精とかチ○ポとか、いろいろ見慣れてあんまりいい感じじゃないなあ。

思いつつ、顔を赤らめて一物を凝視し続ける少女。そうしつつも、ゴリゴリはやめない。

体験版終わり

この後、ボクサーの復讐開始

後輩を集めて少女らを犯そうとします

そして金責めで返り討ち、

後輩たちまで金責めと短小言葉責め、去勢嘲笑を食らいまくります

少女と仲間たちの金責めを製品版でお楽しみください